「キリストによって【主】の祭司となる」　イザヤ書　61 章 1-11 節

2025.1.26　礼拝

序論）

イザヤ 61 章は、どの視点で解釈するのかによって見えてくるものがだいぶ変わってきます。

イザヤが預言した当初

例えば、イザヤを通して、バビロン捕囚などが預言されていたユダの人々にとってこの預言は、背きの罪によって捕囚の民となった自分たちが、【主】に遣わされたメシア（油注がれた者）によって癒やされ、慰められ、解放され、【主】の祭司としての立場を確立する預言として受け取ったと思われます。

ですから、8-9 節の【主】の約束と 10-11 節の【主】の民の証しは、自分たちに与えられた約束であり、自分たちがやがて告白する賛美として受け取られていた事でしょう。

しかし、【主】イエスキリストは、イザヤ 61 章の 1.2 節の預言は、バビロン捕囚からの解放によって成就したのではなく、キリストによって成就したと宣言されています。（ルカ 4：21）

ルカの福音書の 4 章 17 節から 21 節を読みます。

ルカの福音書

4:17 すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その巻物を開いて、こう書いてある箇所に目を留められました。

4:18 「主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、

4:19 主の恵みの年を告げるために。」

4:20 イエスは巻物を巻き、係りの者に渡して座られました。会堂にいた皆の目はイエスに注がれていました。

4:21 イエスは人々に向かって話し始められました。「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」

訳が少し違いますが、イエス様が引用したイザヤ書と今日取り扱っている 61 章の

1 節、2 節は同じ箇所です。つまり、イザヤ 61 章の預言は、捕囚の民とされたイスラエル人たちの解放の預言ではなく、キリストによって救われた者たちのことを示す預言なのです。

これを踏まえた上で今日の箇所を理解していきたいと思います。

1）キリストの目的（1-3 節）

まず、1-3 節にはキリストの目的が語られています。ここに書かれている「わたし」とはキリストのことです。1 節を読みます。

61:1【神】である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、【主】はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、

「貧しい人」というのは単純に経済的に貧しい人のことだけでなく、打ち砕かれている人のことです。また、最後の「囚人には釈放を」は、「囚人には目が開かれることを」と訳した方がことばのニュアンスに忠実です。

【主】イエスキリストは、打ち砕かれている人に福音を告げ、罪の支配、サタンの支配にとらわれている人を解放し、この世の暗闇によって真理が見えなくなっている人の目を開いて真理を見せるためにこの世に来てくださったのです。

ですから、【主】イエスキリストが来られたのは（**2 節を表示**）「恵みの年」が始まったことを意味しており、私達は今、「恵みの年」の中を生きています。

しかし、イエス様がこの箇所を引用されたとき、2 節の「われらの神の復讐の日を告げ、すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。」ということは言われませんでした。なぜでしょうか。それは、「神の復讐の日」というのは 2000 年前にイエス様が来られた時のことではなく、世の終わりの時、【主】イエスキリストが再び来られたときに行われることだからです。

人々が救われ、慰められる「恵みの年」は長く、【主】に逆らった者たちに対する「神の復讐の日」とは世の終わりの短い期間です。だから【主】は恵みの時は長く、復讐はあっという間に終わることを示すため。「恵みの年」「復讐の日」という言い方をされています。

そして、この二つが成就したとき、（**3 節 a 表示**）【主】の民は完全な慰めを受け、灰を飾りに、嘆きを喜びに、憂いを賛美に変えられるのです。

２）救われた者の使命

　では、この恵みを受けた者は、恵みを受け取って終わりなのでしょうか？
3 節の後半から 7 節には、救われた者の使命が書かれています。3b 節を読みます。

61:3b 彼らは、義の樫の木、栄光を現す、【主】の植木と呼ばれる。

（3 節表示）聖書は、救われた者のことを「義の樫の木、栄光を現す、【主】の植木と呼ばれる」と語っています。樫の木は当時、偶像を作る材料としてよく使われていました。しかし、キリストによって救われたことにより、偶像礼拝者は「正しい樫の木」となり、神様の栄光を現すために、【主】に新しく植えられた植木になるのです。
　つまり、キリストによって救われた者は、偶像に使われるものから、【主】の栄光を現す者へと新しく植え替えられたことをしめしています。
　みなさん、【主】に救われた私達は、まったく新しい存在なのです。

　そして、そのように新しくされた私達には二つの使命が与えられています。一つは、廃墟を復興すること。もう一つは【主】の祭司として、神様と人々をつなぐことです。4 節を読みます。

61:4 彼らは昔の廃墟を建て直し、かつての荒れ跡を復興し、廃墟の町々、代々の荒れ跡を一新する。

　この世界は、人が罪を犯したことによって呪われてしまいました。ある意味でこの世界に地震や津波といった災害。どうしてこのようなことが起こるんだと思えるような悲しい出来事があるのは、私達が【主】に逆らい、【主】が良いとされた素晴らしい世界を壊してしまった結果であるのです。
　私達は、この廃墟ともいえるような荒れ荒（すさ）んだ世界を、神様を礼拝し、【主】のみ心が実行される正しい世界へと作り変える使命を持っています。別の言い方をすると、壊された神の国の復興が私達の使命なのです。

　賀川豊彦という牧師は、キリストに救われた者の使命として地上に「神の国」を実現することを目指していました。彼は神の国の実現を目指して、農民の生活を向上するための**農民福音学校の設立**し、労働者の権利向上のための**労働組合を結成**しました。また、共に助け合う精神を広めるため**消費組合や協同組合**を作り、**その他**様々な弱者救済のための取り組みをし、その上で**全国を巡回して伝道**してまわったのです。

彼にとって神の国の建設は、伝道だけではなく、世の中の人々を愛し、その人たちを助けるための実際的な行動によって実現するべきものだったのです。
イエス様も良きサマリヤ人のたとえで言われているように、実際的な愛の実践を求めておられます。
私も、最近、本多民生として、また、富川福音教会、日高キリスト教会として、実際的な愛の実践としてどうしたらいいか。何ができるかを考えています。
みなさんは、どのようにしたら愛を具体的に実践でき、神の国を立ち上げることができると思うでしょうか。

私は、美和子さんや馬場さんが、野島さんとか、素川さんとかを訪問して励ましたりしているのは、非常に見習うべき愛の行動だと思っています。
私達は賀川豊彦牧師のように大きなことはできないかもしれません。しかし、助けが必要な人に、救われるべき人に声をかけることは、私達ができる最初の神の国運動といえるのかもしれません。

私達、救われた者に与えられている使命はもう一つあります。それは【主】の祭司としての働きです。5-7 節を読みます。

61:5 他国の人は立って、あなたがたの羊の群れを飼い、異国の民があなたがたの農夫となり、ぶどう作りとなる。
61:6 しかし、あなたがたは【主】の祭司と呼ばれ、われわれの神に仕える者と言われる。あなたがたは国々の財宝を味わい、彼らの富を誇る。
61:7 あなたがたは恥に代えて、二倍のものを受け、人々は侮辱に代えて、その分け前に喜び歌う。それゆえ、人々は自分の地で二倍のものを所有し、とこしえの喜びが自分のものとなる。

ここでは、他国人が救われた人たちのために羊飼いや農夫になり、救われた人たちはその人達から財産や富を得ると言われています。7 節の 2 倍のものを受ける。というのも、この世の人たちから十分な富を得ることを示しています。
これは、私達が、この世の人たちから財産を搾取する立場になったことを示しているのでしょうか？
そうではありません。これは祭司やレビ人たちがどのように富を得ていたかを旧約聖書的に理解すると意味がわかります。

祭司やレビ人たちは、自分の相続地を持っていなかったゆえに、【主】にささげられた聖なる生贄を自分たちの食べ物にすることが許されていました。彼らは自分たちでささげ物を用意するのではなく、人々が用意した子羊や雄牛といった生贄や、穀物のささげ物などを受け取り、それを用いて【主】を礼拝し、日々の糧を得ていました。

他国人が羊飼いになったり、農夫になったりして富をもってくるというのも、そうゆうことだと思います。つまり、キリストによって救われた者は【主】と人々をつなぐ祭司なのです。

祭司は、時に人々の罪が赦されるためにとりなしの祈りをし、時に【主】のみこころを人々に伝えます。

だから、私達も、祭司としての働きをするため、この世の人たちのためにとりなしの祈りをし、【主】イエスキリストの福音を伝え、キリストによる【主】の赦しを伝えていくのです。

3）【主】による祝福の証明

私達が【主】に祝福されていることは、【主】ご自身が証ししてくださいます。

8 節、9 節を読みます。

61:8 「まことに、わたしは【主】、公正を愛し、不法な略奪を憎む。わたしは真実をもって彼らのわざに報い、永遠の契約を彼らと結ぶ。
61:9 彼らの子孫は国々のうちで、末裔は諸国の民のうちで知れ渡る。彼らを見る者はみな、彼らが【主】に祝福された子孫であることを認める。」

8 節で【主】は「**公正を愛し、不法な略奪を憎む**」と宣言されています。そして、その上で【主】は「わたしは真実をもって彼らのわざに報い」と言われています。つまり、正しいことをしている者は正しい者としての報いを与え、不法を行っているものは不法な者としての報いを与えると言われているのです。

これは【主】が正しい裁きをしてくださることを意味しています。そして、【主】はその裁きによって、私達が【主】から祝福されていることを世の中に人々に示してくださるのです。

この世の多くの人々は、戦争や多くの理不尽を見て、神様の存在を否定し、その神様を信じている私達の信仰を否定します。でも、【主】は世の終わりの時に、この世のあらゆる不正を正し、このお方を信じて従う者の正しさを証明し、キリストによっ

て救われていることがどれほどの祝福なのかを示してくださるのです。
　だからこそ、私達は自分で自分の正しさを示すのではなく、公正を愛し、不法な略奪を憎まれる【主】が、本当の正義がどこにあり、キリストによって救われたことがどれほどの祝福なのかを示してくださることを信じて、このキリストを証ししていくのです。

４）主の民の証し
　最後に、【主】の植木とされた【主】の民がどのような証しをするのかを 10 節、11 節を読んで確認して終わります。

61:10 私は【主】にあって大いに楽しみ、私のたましいも私の神にあって喜ぶ。主が私に救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってくださるからだ。
61:11 地が芽を出し、園が蒔かれた種を芽生えさせるように、【神】である主が、正義と賛美をすべての国々の前に芽生えさせるからだ。

　10 節でも、私たち人間ではなく【主】が救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせ、栄冠を被らせ、宝玉で飾ってくださることが強調されています。特に「栄冠」と訳されているところは、元のヘブル語では「祭司として仕えるための頭飾り」となっていることを覚えてほしいです。
　【主】は私達を輝かしい祭司にするために、私達を救いや正義などで着飾らせてくださるのです。
　そして、その結果として、私達の中から正義と賛美が芽生え出てくるのです。

　【主】は、私達を素晴らしい祭司として着飾らしてくださっており、自然と私達の内側から正義と賛美が湧き出るようにしてくださっています。だからこそ、私達はそのような存在に変えられていることを信じて、【主】の祭司としての努めをしていくのです。

結論）
　イザヤ書61章を通して語られる預言は、単なるバビロン捕囚からの解放ではなく、キリストによる救いによって真に成就したことを示していました。イエス・キリストは、貧しい心に福音を告げ、罪と闇に囚われた私たちを解放し、真理の光で照らすために来られたのです。

この恵みを受けた私たちは、「義の樫の木、栄光を現す、【主】の植木」として新しく創造され、二つの使命を与えられています。

一つは、荒廃した世界を神の国へと復興させることです。それは日々の生活の中で愛を実践し、助けを必要とする人に手を差し伸べ、神の国の実現に向けて行動することです。

もう一つは、【主】の祭司として、神と人々との架け橋となることです。人々のために祈り、福音を伝え、キリストの赦しを示すことで、神の愛を広めていくのです。

【主】は公正を愛し、真実をもって私たちを祝福してくださいます。

私たちが【主】に信頼し、祭司としての使命を果たすとき、【主】は私たちの正しさを証明し、祝福された子孫であることを示してくださいます。

ですから、私たちは【主】にあって大いに喜び、救いの衣、正義の外套を身に着けて、日々を歩みましょう。そして、【主】が私たちを祭司として立ててくださったことを信じ、内から湧き出る正義と賛美をもって、【主】の栄光を世界に表していきたいと思います。

お祈りします。